

“金沢八景”をめぐる景観環境史

Landscape Environmental History of The “Kanazawa-Hakkei”

学籍番号 47-156741

氏名 坂手 久美子 (Sakate, Kumiko)

指導教員 辻誠一郎 教授

1. 研究背景・目的

景勝地・観光地として親しまれていた“金沢八景”であったが、その眺望が最も優れていたとされる近世初期以前の姿は、時代の流れと共に失われてしまった。最大の原因は近代以降の宅地造成を目的とした埋め立てである。人間の活動の変化は平潟湾の変遷に多大な影響を与えたのだ。

失われてしまった、とするとあたかも人間活動は平潟湾をとりまく環境に悪影響でしかなかったかのように聞こえる。しかし、港湾都市や景勝地としての性格は、人々が平潟湾の地形の特異さを見出し、それぞれの生態系とバランスを保っていたからこそ成り立っていたものと考えられる。“金沢八景”の事例はまさに景観生態系のバランスが崩れたことによる景観消失の例と言えるだろう。

一度失ってしまった景観を取り戻すことは不可能に近い。我々に出来ることは、失われてしまったものを取り戻そうとする試みではなく、人為的な開発により景観が失われていく過程を景観環境史として捉え直し、その過程における問題点を抽出することである。

なぜ“金沢八景”は生まれたのか、なぜ埋め立てられたのか、なぜ開発の対象地になったか、そしてなぜ“金沢八景”は「失

われてしまった」とされているのか。これらを明らかにし、現在の平潟湾をどのように捉えるべきかを検討する。

2. 研究方法

2-1. 研究の構成

本研究では、“金沢八景”はどのようにして生まれ、どのように変化したのかを明らかにする。すなわち、“金沢八景”を生み出した平潟湾の地形の変遷を自然環境史とし、平潟湾をとりまく金沢・六浦の都市空間の機能がどのように変化したかを社会文化史として、この二つの視点を複合的に分析し、“金沢八景”をめぐる景観環境史を描き出す。

2-2. 研究対象・手法

・対象地域

本研究の対象地は神奈川県横浜市金沢区にある平潟湾とする。“金沢八景”は、かつて平潟湾を中心とした内湾環境において見られたが、現在は当時の内湾のほとんどが埋め立てられてそれらと同じの景観を見ることは難しくなった。

・対象年代

対象年代は、約10万年前の最終間氷期から、現在の地形に近い約1500年前の古墳時

代までの平潟湾の古環境の変遷とする。また、中世から現代までの平潟湾をとりまく社会文化的な変遷を辿る。

・研究手法

松島（1991）や貝塚（1987）などの自然環境史と、平田（1984）や関（1984）らが先行していった金沢に関する社会文化史の資料を収集し、それぞれを複合的に分析することで、“金沢八景”の変遷をまとめる。

また、地図類・絵画類・写真類などの史料から、人々がどのように“金沢八景”を位置づけていたのかをとらえる。

3. 研究結果

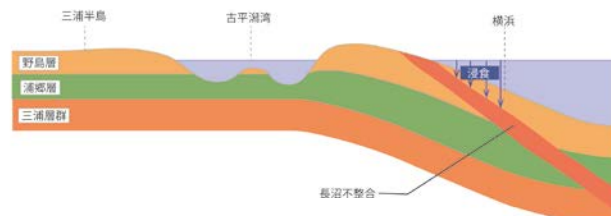
“金沢八景”をめぐる自然環境史と社会文化史を複合した分析を以下にまとめる。

平潟湾は東京湾を縁取るリアス式海岸の内陸に入り込んだ小規模な内湾である。東京湾をとりまく関東平野は山地・台地・低地から成り立っている。このような地形は主に地殻変動（大地形の変動）と氷期-間氷期の氷河性海面変動によって形成された

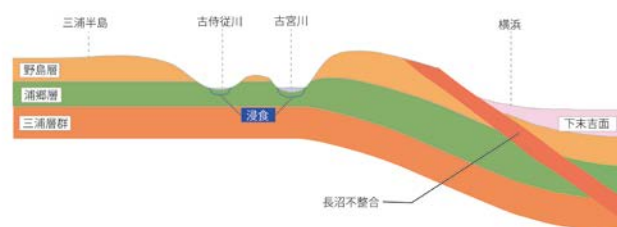
（貝塚, 1987）。約 10 万年前の最終間氷期最盛期、関東造盆地運動で沈降が進む関東平野には海水面の上昇により古東京湾が形成され相模層群が堆積したが、平潟湾を含む上総層群は山地が維持され古平潟湾が形成された。最終氷期最盛期には寒冷化によって海面が低下し、関東平野では浸食作用が進み大河川が形成された。平潟湾に流れ込む二つの河川は分水界が限られており土砂の堆積が進まず深い内湾が維持された。縄文海進最盛期に再び関東平野に海が侵入し、奥東京湾を形成した。平潟湾は最終氷期に形成された深い谷が入り込み、深海の内湾が形成された。古墳時代には海面が低

下し、洲崎の砂州が出来ると自然の堤防となり、平潟湾の内湾環境は明治初期頃まで維持された。

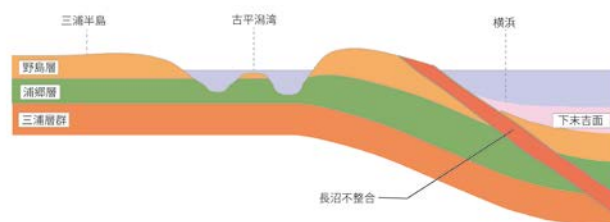
最終間氷期最盛期（約 10 万年前）



最終氷期最盛期（約 3 万年前）



縄文海進最盛期（約 8000 年前）



古墳時代（約 1500 年前）

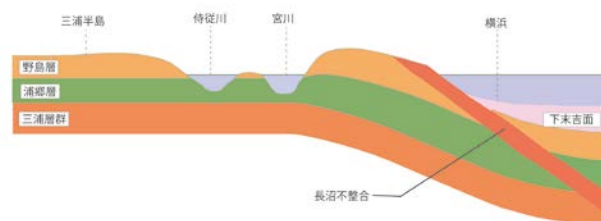


図 1 関東平野南部の南北異質断面と氷河性海面変動との関係

■中世の平潟湾の景観

中世の金沢は鎌倉の外港として栄えた。平潟湾にはいくつも船着場が出来、船主・問丸など海に関連した職を生業としていた人々にとって、平潟湾は日々の生活の場で

あり（神奈川県立金沢文庫，2000）、平潟湾の地形がつくり出す景観そのものに関心を寄せる人々は少なかったと考えられる。

■近世の平潟湾の景観

近世の平潟湾は“金沢八景”を形成する内湾として様々な絵図にも描かれている（図2）。平潟湾の景観はこの時期に出版さ



図2 武陽金沢八景略図(馬垵/1814年、金龍院版)（神奈川県立金沢文庫，1993）

れた浮世絵にも描かれている。人々の生業も遊覧客を意識した飲食店をなどが増えていった時代である。また、近世初期から続く新田開発で内川入江の半分ほどが埋め立てられた。

■近代以降の平潟湾の景観

明治初期までは江戸時代の遊覧地としての性格も残していたが、大正時代～戦前にかけて海軍による埋め立て工事で野島地先の景観は大きく変わった。平潟湾は、戦前から電鉄会社による埋め立てがはじまり、戦後も横浜市主導の埋め立て事業がすすめられた（内田四方蔵，1987）。平潟湾や泥亀新田の埋め立ては人口増加による住宅供給を目的とした宅地化であった。泥亀新田の辺りには金沢区役所や中央郵便局、地区センターなど行政の施設が建設された。また、称名寺裏山、釜利谷地区などが民間企業によって宅地造成されたのを皮切りに、山

地も次々と宅地開発が進められていった。

以上のように各時代の平潟湾をとりまく景観を捉えると、景観の変化は時代が変わるごとに連続的に起きている。中世にみられた港湾都市の様相は近世にはほとんど見られなくなっていたし、近世の遊覧地“金沢八景”は近代以降の海軍による埋め立て、民間企業や行政による宅地開発などでその姿を消した。中世から現代まで政治や文化の中心地に近い場所に位置していたことで時代の影響に晒されやすく、変化を求められた地域であったと言える。これらの史実から、“金沢八景”は失われた、と否定的に捉える必要はなく、人間の活動の変化によって平潟湾の用途も変わり景観が変化したに過ぎない。我々が失ってしまったと嘆く“金沢八景”がみられた近世の人々は、もしかしたら「中世の時代に鎌倉の外港として栄えた平潟湾」に対して憧憬の念を抱いていたかもしれない。過去の景観に捉われ現在の景観に目を向けずにいることは、地域の魅力を見出す時の大きな妨げとなる可能性がある。むしろ重要なのは、埋め立てや宅地造成が成された現在の平潟湾にどのような景観を見出せるか、ということではないだろうか。

4.2 “金沢八景”の未来

2008（平成20）年、横濱金澤シティガイド協会によって実施された「新金沢八景選定事業」（横浜市金沢区HP）で、以下の“新金沢八景”が投票により選定された。

- ①春色（しゅんしょく）：西柴の桜トンネル
- ②潮干（ちょうかん）：海の公園の白砂青松
- ③展望（てんぼう）：海と緑を辿るシーサイドライン

④一望（いちぼう）：金沢自然公園からの眺望

⑤彩色（さいしょく）：八景島の紫陽花

⑥白帆（しらほ）：横浜ベイサイドマリナーの夕景

⑦古道（こどう）：朝比奈切通し

⑧梅花（ばいか）：能見堂跡

8つの景観のうち、潮干・展望・一望・彩色・白帆の5つは戦後の金沢地先埋立事業に関連した施設である。金沢地先の埋め立ては、横浜市が主導して行った事業で、海の公園や八景島、金沢自然公園などは、区民のレクリエーション施設であり、シーサイドラインは埋め立て地に居住、または働く人々のために建設された交通機関である。“新金沢八景”であるから、埋め立て地に関連する景観が一つも選ばれないということは無いにしても、半分以上というのは若干の疑問が残る。また、事業の目的に区外に対するPRが含まれていることから、“新金沢八景”をシンボルマークとして、どうにか観光客を誘致出来ないだろうか、という意図がみて取れる。

“金沢八景”は瀟湘八景の景観から比定された景観であった。“金沢八景”を画題にした浮世絵などを見て、どれほどの人々がまだ見ぬ金沢の景観を想起されただろう。一方で、“金沢八景”にはなっていないけれど、人々を魅了するような景観もあつたに違いない。“金沢八景”だけが金沢を描いているとは限らないのだ。それを踏まえると、“新金沢八景”はこれこそ金沢区の特徴です、と言わんばかりの場所が選出されている。そういった誰もが一目納得するような場所だけではなく、まだよく知られていない、金沢区や平潟湾の新たな魅力が感じら

れる景観を見出してこそ、真の“新金沢八景”と言えるのではないだろうか。

・結論

“金沢八景”が見られる平潟湾の内湾環境がどのように形成され、中世以降の人間活動によってどう変化したのかを整理した。その結果、平潟湾の特異な内湾環境が果たす機能は時代ごとに変化しており、景観の変化は連続的なものであったことが明らかになった。「失われた」事実は確かにあるが、人間活動が常に平潟湾に悪影響だったわけではなく、港町や景勝地としての性格が充てられたのも、人間の活動によるものであった。“金沢八景”が「失われた」と捉えるか、八景に縛られない新たな平潟湾の景観を見出せるかは、人の心に依るところではないだろうか。

引用文献

松島義章（1979）：「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」『第四紀研究 17（4）』，p243-265，日本第四紀学会。

松島義章（1991）：「横浜南部、金沢八景瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の¹⁴C年代 t p それに関連する問題」『神奈川県立博物館研究報告（自然科学）』，20，31-49，神奈川県立博物館。

貝塚爽平（1987）：「関東の第四紀地殻変動」『地学雑誌』，96，223-240，日本地質学会。

平田恒吉（1984）：『金沢と六浦荘時代』，金沢と六浦荘時代頒布会。

関靖（1984）：『かねさは物語』国書刊行会。

神奈川県立金沢文庫（2000）：「六浦・金沢～海が育んだ歴史と文化～」神奈川県立金沢文庫。

神奈川県立金沢文庫（1993）：「金沢八景 歴史・景観・美術」神奈川県立金沢文庫。

内田四方蔵（1987）：『金沢の100年』横浜市金沢図書館。横浜市金沢区：「記者発表資料 平成20年（2008）新金沢八景決まる」

<<http://www.city.yokohama.lg.jp/kanazawa/03houdou/2008/080228.html>>2017年1月10日閲覧